

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	半田真弓（はんだまゆみ）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	人間科学研究科 修士 1 年
発表年月 または事業開催年月	2025 年 1 2 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 45 回日本看護科学学会学術集会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	半田真弓
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	介護事業所における超音波診断装置の影響に関する研究
発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）	
<p>概要・成果</p> <p>【研究目的】</p> <p>日本の介護老人保健施設（以下、施設）では、認知症日常生活自立度Ⅱ以上の入所者が全体の約 86% を占めている。認知症症状の重い高齢者介護において、介護従事者（以下、職員）の業務負担が大きく、心理的影響が顕著なのは排泄介助である。本研究は、職員による排泄ケアへの超音波診断装置の活用が業務生産性（排泄介助回数）に与える影響を検証し、あわせて職務満足度およびワーク・エンゲイジメントへの影響とその関係性を一体的に捉え、明らかにすることを目的とする。</p> <p>【研究方法】</p> <p>排泄介助回数変化の調査では、4 施設の利用者管理日誌（個人情報除外）から「排泄ケア」に該当する記録を抽出し、2022 年 3 月～7 月（導入前 3 施設）と 2024 年 3 月～7 月（導入後 4 施設）の各 5 か月間を比較した。導入前 593 件、導入後 611 件の計 1,204 件を分析対象とし、対応のない t 検定を用いて SPSS Statistics 28.0 で解析を行った。また、4 施設の職員 50 名を対象に、超音波診断装置導入後の職務満足度とワーク・エンゲイジメントに関する web 調査を Qualtrics で実施し、SPSS で分析した。ワーク・エンゲイジメント尺度には主因子法およびプロマックス回転による因子分析を用いた。</p> <p>【倫理的配慮】</p> <p>本研究は、早稲田大学の「人を対象とする研究に関する倫理委員会」による倫理審査の承認（承認番号：2024-288）を得たうえで実施した。</p> <p>【結果】</p> <p>排泄介助回数について、超音波診断装置導入前後の 2 群間における t 検定の結果、有意な差が認められた（$p < 0.002$）。このことから、排泄ケアへの超音波診断装置活用は、職員の排泄介助回数に顕著な影響を及ぼすことが示された。また、超音波診断装置活用後に実施したアンケート調査では、回収数は 41 件であり、うち欠損値を含む 3 件を除外し、38 件を分析対象とした。装置活用後における職員の職務満足度とワーク・エンゲイジメントの関係は、（0.512）と高い相関がみられた。さらに、ワーク・エンゲイジメント尺度の因子分析では 2 因子が抽出され、両因子間の相関係数は 0.778 と高い相関を示した。</p>	

【考察】

本研究では、職員が排泄ケアへ超音波診断装置を活用することにより業務生産性が向上し、働く意欲などに影響があることを明らかにした。排泄ケアに超音波診断装置を取り入れることにより、職員の排泄介助の回数が顕著に減少し、介護における業務軽減、生産性向上に対して有意な結果が示された。超音波診断装置を活用して利用者の排泄コントロールのケア指針を決定するという行為が、チームケアという協働連携を形成し、効果的なコミュニケーションを実現させたと考える。信頼関係や共感の醸成、業務効率化といった変化が、職場満足度やワーク・エンゲイジメントに好影響を与える可能性があると考えられる。

※無断転載禁止